

□書 評

穴沢雄作, 有山 襄, 本山博信著

臨床 X 線診断学 第4巻2 腹部 2

東京大学教授 石 田 正 統

近年特に多くの医学書が発刊され、手軽に勉強するにはまことに便利な時代になって来たことを有難く思っている。医学書にもいろいろあるが私は著者自身の経験を客観的に掘り下げたものに最も強く惹かれる。嘘がなく、実際に真似すればできるからである。しかしそのような本を書く人の立場に立って考えてみるとまことに大変な大事業であろう。そのような本は長い年月の経験の労苦がそのさりげない一行一句の間に浸み出ているものである。この本をひもといた時の第一印象は正にそれであり“ああ！ やんぬるかな”と羨ましい気もして先ず序から読み

始めた次第である。そして編集者白壁教授がその序に述べられたように私も一挙に読み下す気になった。読み終わったときには確かな満足感があった。本書の価値はその長い経験が淡々とにじみでている点にあるといえる。

すべてもれなく欲しい写真を集めることは一見容易に思われるが実際には並大抵のことではない。写真をうつす技師の技術に左右されたり、担当する医師の方針も時期によって変わるからである。

この本のもう一つの特徴は主として外科医が執筆し、強力な内科医を背景とし、それに X 線診断学の専門

家が巧妙適切なアドバイスを加えている全体のバランスの良さであろう。

元来この胆道系の X 線診断には内外を問わず外科医が参画して来た。その理由はこの材料は胃やその他の臓器のように体外に取り出していつでも誰にでも見せられるということができず、ほとんどが手術室の中で答が出されるからであろう。しかし外科医は直視下に見ることは知っていてもそれなりに内科医とは違った欠点があり、またもとより放射線科学の基本的な専門医でもないわけである。

最近の実戦ばやりの世の中である。曰く「実地……」「……の実際」などととかく経験の安売りの傾向なしとしない。その中において本書は「臨床 X 線診断学」であり、基礎的なことを明らかにすると共に中味は熟練者の実際の手ほどきでもある。

私共にも大いに参考になる理論と実際の良書であり、これから始める人にも大いに参考になると思われる。喜んで座右に置きたい。

A 4 判・頁 140・写真 138・1971

¥ 4,500 円 140 医学書院刊